

ろう幼児の語彙の研究

岡田 明・都築 繁幸

I 問題

ろう児は、一般に語彙やシンタックスの理解や表現に多くの問題をもっている。なかでも、単語は言語の単位であり、その研究は重要な意義をもつものと思われる。なお、ここで語彙とは、ろう児が所有する単語の総体のことである。ここでは、ろう幼児が所有している語彙の量とその構造を明らかにすることが重要な課題になる。

従来は、健聴児についても主として幼児期を対象として研究がおこなわれてきた。久保良英¹⁾は自分の子どもの1才から6才までの全年令段階の語彙を収録し、その量と構造を分析した。McCarthy, D. A²⁾は、1才から6才の子どもの語彙を統計的に処理するとともに機能的な立場からの考察もおこなった。牛島義友³⁾は、幼稚園児に多く使用される単語を調査し幼児の語彙の構造の分析をおこなっている。阪本一郎⁴⁾は、子どもの語彙を人間語彙、生活語彙、属性語彙、社会語彙、文化語彙等に分類した。本研究でも、阪本の分類を利用することにした。(なお、阪本の分類体系は付表として示した。)

佐藤昭一と平賀幸⁷⁾は「ろう学校生徒の語彙と言語表現——受容語彙検査を中心として」を検討している。佐藤らは、無意味綴りをいくつか並べその中に1つの有意味語をまぜておき、生徒にその有意味語を見つけさせる方法をとっている。それによって、語の意味理解の有無を追究することなく、でたらめな反応を一定水準でチェックできるとしている。

しかし、ろう幼児の語彙の量的な発達と構造的な発達をとりあつかった研究は少ないようである。

そこで、本研究は、ろう幼児を対象としてかれらの語彙を量的ならびに構造の面から分析し、言

語指導における基礎資料を得ることを研究の目的としている。

II 方法

被験者は、1年保育児が7人、3年保育児が9人であり、性別、教育歴、失聴年令、失聴原因、聴力損失の程度は表1のとおりである。

語彙調査にあたっては、阪本一郎著⁴⁾「教育基本語彙」の中からA1段階の語彙を2,980語選定し、それを総計34ページに印刷したものをろう幼児の母親に配布した。母親は、家庭と学校で被験者に常に密接な接触をもっていたものだけを選定した。母親は、それぞれの単語の熟知度を2段階

表1 被験者一覽

	性別	年令	教育	失聴年令	失聴原因	聴力		
						500Hz	1000Hz	2000Hz
A	男	4:0	1年	0才	遺伝性?	75	90	95
B	女	4:0	1年	1才	高熱?			
C	男	4:0	1年	0才	不明	105	110	スケールアウト
D	男	4:0	1年	1才	はしか?	65	90	スケールアウト
E	男	4:0	1年	0才	不明	65	65	75
F	女	4:0	1年	0才	不明	85	95	95
G	女	4:0	1年	0才	不明			
H	男	7:8	3年	0才	不明	75	90	100
I	男	5:3	3年	0才	不明	80	95	105
J	男	5:0	3年	0才	不明	85	100	110
K	女	5:8	3年	0才	不明	95	105	115
L	女	5:9	3年	0才	不明	85	90	105
M	男	6:0	3年	0才	家族性	70	80	85
N	男	6:0	3年	0才	不明	50	75	80
O	女	7:0	3年	0才	未熟児	50	80	スケールアウト
P	女	6:0	3年	0才	家族性	50	100	スケールアウト

で評定することが要請された。そのときのインストラクションは次のとおりであった。「次には、たくさんの言葉が並んでおります。あなたが、ご自分のお子様をよくごらんになって、お子様がつぎの言葉を知っていると思えば、それぞれの言葉の右に○を、知らないと思えば、×をつけて下さい。例、あさひ ○、ひつじ ×…… 読めたり書けたりしなくても、聞いてわかれば知っているとします。」

評定用紙は、昭和52年2月に配布し4月に回収した。

分析にあたっては、熟知性のみられた単語のみを取りあげ、それらを阪本一郎の語彙の分類体系にもとづいて分析し、同時に品詞の分析も行なった。数量的分析においては、それぞれの項目への百分率を利用したが、統計的検定においては、それらの数値を角変換し、それをもとにして分散分析などの検定を実施した。

III 結果

1年保育児を幼1、3年保育児を幼3とし各々について、熟知量、阪本の分類体系にもとづく分析、品詞の分析の結果を示すことにする。

(A) 幼1の場合

① 熟知量について

表2は、被験者別の熟知語数と熟知率を示している。語彙量には、個人差があることはすでに指摘されているが、本研究においてもそのような傾向がみられている。E、Gは、40前後であり、EとGを除いて考えれば120前後であると推測され

表2 幼1の熟知量

	熟知語	熟知率
A	127	4.3(%)
B	119	4.0
C	114	3.9
D	133	4.5
E	42	1.4
F	100	3.3
G	33	1.1
$\bar{x}=95.4$ $\bar{x}=3.2\%$ $SD=38.0$		

表3 被験者別のカテゴリ語数

被験者 カテゴリ		A	B	C	D	E	F	G
		人	a1 呼 称	8	9	9	10	4
	a2 身体・衛生	8	8	10	8	3	7	4
間	a3 行 動	8	6	3	9	1	4	1
	a4 心 理	9	6	4	7	1	6	0
生	b1 飲 食	19	12	12	11	2	8	7
	b2 服 飾	7	8	5	6	1	7	0
活	b3 住 居	0	2	2	1	2	4	1
	b4 道 具	12	5	6	11	5	4	2
自	c1 自然現象	0	2	2	2	0	0	0
	c2 地 表	0	0	0	1	0	0	0
然	c3 動 物	12	7	13	16	0	7	3
	c4 植 物	1	3	3	1	2	1	1
	c5 鉱 物	0	0	0	0	0	1	0
	c6 時	1	4	3	2	0	3	0
属	d1 教 量	6	8	6	2	1	2	1
	d2 形	4	2	2	3	1	4	2
	d3 色	8	6	11	8	2	4	3
性	d4 位置・関係	5	1	1	2	0	5	0
	d5 性 質	2	9	4	2	4	9	0
	d6 状 態	2	0	1	3	1	3	1
社	e1 組織・政治	0	0	0	0	0	0	0
	e2 職業・身分	1	1	1	1	0	0	1
会	e3 交 通	4	4	3	5	1	2	2
	e4 産 業	0	0	0	0	0	0	0
	e5 軍 事	0	0	0	0	0	0	0
文	f1 社会・文化	1	1	2	4	2	2	0
	f2 知識教育	0	1	0	0	0	0	0
化	f3 芸 術	0	0	0	0	0	0	0
	f4 機 械	1	3	0	3	0	0	0
	f5 運動・遊戯	1	2	2	9	3	3	1
雑	g1 一般・雑	7	9	9	6	5	7	2
計		127	119	114	133	42	100	33

る。熟知率は、3.2%でありかなり低い。

② 阪本の分類体系に基づく分析

表3は被験者別のカテゴリ語数を示している。人間語彙は、各下位カテゴリにはほぼ一様に分布している。生活語彙では、飲食、道具が多い。自然語彙では、動物が多く、時、地表などは熟知量が少ない。属性語彙では、色が多く、状態

表4 カテゴリー別の平均語数

	人間	生活	自然	属性	社会	文化	雑	計
\bar{x}	23.1	23.1	13.0	20.0	3.7	6.0	6.4	95.4
SD	10.1	9.4	7.1	8.2	1.7	4.5	2.3	
%	24.2	24.2	13.6	21.0	3.9	6.4	6.7	100%

表5 分散分析表

変動因	平方和	自由度	平均平方	F
カテゴリー	2467.4	7-1=6	411.2	135.7**
個体	419.1	7-1=6	69.9	23.1**
残差	109.1	6×6=36	3.0	
全体	2995.6	7×7-1=48		(** P<0.01)

表6 t検定表

	人間	生活	自然	属性	社会	文化	雑
人間							
生活	0.712						
自然	** 6.103	** 4.638					
属性	1.643	1.648	* 3.313				
社会	** 12.986	** 19.026	** 5.439	** 8.182			
文化	** 7.349	** 6.061	2.165	** 5.318	1.012		
雑	** 10.533	** 9.680	1.253	** 11.537	2.134	0.689	

(** P<0.01 * P<0.05)

は少ない。社会語彙は、交通が多い。

表4は、カテゴリー別の平均語数を示している。表4に示されるように、人間語彙、生活語彙、属性語彙が多く、社会語彙、文化語彙が少い。カテゴリー間に差があるかどうかをみるために分散分析を行なった結果を表5に示す。分散分析はそれぞれの項目の百分率を角変換した値をもとに行なった。表5に示されているように、カテゴリー間、個体間に1%の有意差がみられた。サンプルが少なく、被験者のうちのEとGの熟知率が低い

表7 被験者別の品詞の語数

品詞	被験者						
	A	B	C	D	E	F	G
名詞	93	86	90	102	30	69	28
数詞	4	5	5	1	0	1	1
代名詞	1	1	0	0	0	0	0
動詞	6	4	2	9	1	4	1
形容詞	18	18	12	16	8	19	1
副詞	5	3	5	4	1	5	2
接続詞	0	0	0	0	0	0	0
助動詞	0	0	0	0	0	0	0
助詞	0	0	0	0	0	0	0
感動詞	0	2	0	1	2	2	0
連体詞	0	0	0	0	0	0	0
接頭語	0	0	0	0	0	0	0
接尾語	0	0	0	0	0	0	0
助数詞	0	0	0	0	0	0	0
計	127	119	114	133	142	100	33

ために個体間に差がみられたと考えられる。カテゴリー間に差がみられたので下位項目の検定(t検定を実施)を行なった結果を表6に示す。人間語彙は、生活語彙・属性語彙を除いた他のカテゴリーにおいて1%の有意差がみられた。生活語彙は、属性語彙を除いた他のカテゴリーにおいて1%の有意差がみられた。

③ 品詞の分析

表7は、被験者別の品詞の熟知語数を示している。各被験者ともに名詞、形容詞、動詞が多い。

表8は、品詞別の平均語数を示している。熟知語数の約75%が名詞で占められている。品詞別の順位としては、名詞、形容詞、動詞、副詞、数詞、代名詞である。品詞間に差があるかどうかをみるために分散分析を行なった結果が表9に示されている。品詞間に1%の有意差がみられ、個体間ではみられなかった。品詞間に差がみられたの

表8 品詞別の平均語数

	名詞	数詞	代名詞	動詞	形容詞	副詞	接続詞	助動詞	助詞	感動詞	連体詞	接頭語	接尾語	助数詞	計
\bar{x}	71.1	2.4	0.3	3.9	13.1	3.6	0	0	0	1.0	0	0	0	0	95.4
SD	28.2	2.0	0.5	2.7	6.2	1.5	0	0	0	0.9	0	0	0	0	
%	74.5	2.5	0.3	4.1	13.7	3.8	0	0	0	1.1	0	0	0	0	100

表9 分散分析表

変動因	平方和	自由度	平均平方	F
品詞	17254.4	7-1=6	287.6	14.7 ^{**}
個体	40.4	7-1=6	6.7	0.3
残差	704.5	6×6=36	19.6	
17999.5 7×7-1=48 (*** P<0.01)				

表10 t検定表

	名詞	数詞	代名詞	動詞	形容詞	副詞	感動詞
名詞							
数詞	31.106 ^{**}						
代名詞	30.631 ^{**}	4.337 ^{**}					
動詞	30.756 ^{**}	2.445 ^{**}	6.951 ^{**}				
形容詞	11.484 ^{**}	4.058 ^{**}	9.366 ^{**}	4.197 ^{**}			
副詞	45.984 ^{**}	0.837 ^{**}	4.298 ^{**}	0.463 ^{**}	3.285 [*]		
感動詞	18.301 ^{**}	0.915 ^{**}	1.490 ^{**}	2.178 ^{**}	0.099 ^{**}	0.760 ^{**}	

(*** P<0.01 * P<0.05)

表11 幼3の熟知量

	熟知語	熟知率
H	356	12.0(%)
I	711	24.0
J	484	16.2
K	645	21.6
L	814	27.3
M	880	29.5
N	1252	42.0
O	1028	34.5
P	1985	66.6
$\bar{x}=906.1$		$\bar{x}=30.4\%$
$SD=458.8$		

で下位検定を行なった結果が10表に示されている。名詞は他の品詞間において1%の有意差がすべてみられた。形容詞と動詞の間でも1%の有意差がみられた。

(B) 幼3の場合

① 熟知量について

表11は、被験者別の熟知語数と熟知率を示している。熟知語数は約900であり、A1段階で約30

%は熟知していることを示している。又、熟知語数が400から2,000となっており個人差が大きいことを示している。

② 阪本の分類体系にもとづく分析

表12は、被験者別のカテゴリーの熟知語数を示している。幼3の場合においても個人差が大きく、下位カテゴリー間にもそれが示されている。人間語彙では、行動、心理が多い。生活語彙では、飲食、道具が多い。自然語彙では、鉱物が少なく、動物、自然現象、時が多い。属性語彙では、数量、色、性質が多い。社会語彙、文化語彙では、交通、運動・遊戯が多い。

表13はカテゴリー別の平均語数を示している。表13に示されているように人間語彙、生活語彙、自然語彙、属性語彙が多く、社会語彙、文化語彙が少ない。又、「一般・雑」に含まれるものが多い。カテゴリー間に差があるかどうかをみるために分散分析を行なった結果が表14に示されている。カテゴリー間に1%の有意差がみられた。カテゴリー間の下位検定を行なった結果が表15に示されている。人間語彙は、他のすべての語彙に1%の有意差がみられた。生活語彙は、自然語彙、属性語彙、社会語彙において有意差がみられた。

③ 品詞の分析

表16は、被験者別の熟知語数を示している。熟知語数の個人差が大きいけれども、名詞、動詞、形容詞が多い。

表17には品詞別の平均語数が示されている。名詞、動詞、形容詞、副詞の順である。品詞間に差があるかどうかをみるために分散分析を行なった結果が表18に示されている。品詞間において1%の有意差がみられた。表19は、表17に示された熟知語としてみられたすべての品詞間でt検定を行なった結果である。したがって、名詞、動詞、形容詞副詞が1つのグループであり、数詞、接続詞等が1つのグループをなしているとみた方がよく、前者と後者で有意な差がみられるのは明らかであろう。そうした点をふまえて表19のt検定の結果をみると、名詞、動詞、形容詞、副詞の間ですべてのくみあわせにおいても1%の有意差がみられた。

表 12 被験者別のカテゴリーの語数

被験者 カテゴリー		H	I	J	K	L	M	N	O	P	
		人	a1 呼 称	18	22	16	19	25	22	28	34
間	a2 身 体・衛 生	14	40	23	42	38	48	56	51	76	
	a3 行 動	19	97	53	90	127	148	234	170	409	
	a4 心 理	14	35	25	32	64	53	53	40	100	
	生	b1 飲 食	37	50	40	46	55	49	65	60	79
活	b2 服 飾	6	20	16	19	25	20	25	25	33	
	b3 住 居	5	14	7	20	16	12	27	35	34	
	b4 道 具	19	50	29	42	54	47	93	74	90	
	自	c1 自 然 現 象	9	19	16	20	30	35	55	28	76
c2 地 表		11	8	4	13	9	10	20	21	34	
然		c3 動 物	40	57	45	50	53	65	75	62	90
		c4 植 物	9	11	3	12	15	16	25	21	30
c5 鉱 物		2	3	1	3	0	3	1	5	4	
c6 時		16	22	11	18	24	27	35	35	53	
属	d1 数 量	11	29	26	23	30	38	35	37	63	
	d2 形	4	7	4	3	10	5	6	7	10	
	d3 色	10	11	8	13	13	12	13	13	14	
	性	d4 位 置・関 係	9	18	13	15	22	22	29	22	51
		d5 性 質	12	36	25	28	28	53	60	39	84
	d6 状 態	6	15	8	6	13	28	51	30	108	
社	e1 組 織・政 治	1	4	2	3	4	8	10	3	22	
	会	e2 職 業・身 分	6	6	9	4	9	5	10	6	19
		e3 交 通	14	23	15	16	21	14	22	25	27
	e4 産 業	1	4	1	3	4	2	6	5	6	
	e5 軍 事	0	0	0	0	1	0	0	0	5	
文	f1 社 会・文 化	11	14	8	12	16	17	30	22	41	
	化	f2 知 識 教 育	3	5	2	6	5	17	26	16	41
		f3 芸 術	0	2	1	4	2	6	5	8	13
	f4 機 械	6	8	5	4	12	9	12	6	13	
	f5 運 動・遊 戯	11	29	17	23	23	26	29	33	36	
雑	g1 一 般・雑	32	52	51	56	66	63	108	95	262	
計		356	711	484	645	814	880	1252	1028	1985	

表 13 カテゴリーの平均語数

	人間	生活	自然	属性	社会	文化	雑	計
\bar{x}	266.3	148.7	150.9	142.9	38.4	61.4	88.1	906.1
SD	160.5	52.1	61.8	77.5	16.3	23.2	65.9	
%	29.4	16.4	16.7	15.8	4.2	6.8	9.7	100%

表 14 分散分析表

変 動 因	平方和	自由度	平方平方	F
カテゴリー	2330.2	7-1=6	388.37	100.10***
個 体	0.96	9-1=8	0.12	0.03
残 差	186.1	6×8=48	3.88	
全 体	2517.3	7×9-1=62		(*** P<0.01)

表 15 t 検定表

	人間	生活	自然	属性	社会	文化	雑
人間							
生活	4.998 ^{**}						
自然	4.548 ^{**}	0.075					
属性	8.590 ^{**}	1.411	1.638				
社会	14.660 ^{**}	1.937	21.462 ^{**}	17.804 ^{**}			
文化	14.686 ^{**}	10.660 ^{**}	15.269 ^{**}	14.561 ^{**}	7.706 ^{**}		
雑	13.141 ^{**}	6.440 ^{**}	7.299 ^{**}	8.443 ^{**}	7.359 ^{**}	1.799	

(** P<0.01)

表 16 被験者別の品詞の語数

品詞	H	I	J	K	L	M	N	O	P
名詞	280	459	332	380	552	574	783	743	1208
数詞	13	17	22	15	15	14	14	18	20
代名詞	3	4	4	4	6	4	13	7	18
動詞	13	135	60	148	132	173	300	135	515
形容詞	32	67	45	70	68	82	77	68	110
副詞	4	12	8	19	17	17	41	31	68
接続詞	0	1	0	0	1	2	6	4	16
助動詞	1	2	3	1	1	1	2	3	5
助詞	1	8	7	5	11	7	5	9	13
感動詞	0	1	0	1	7	3	6	3	7
連体詞	0	0	0	0	1	1	1	0	1
接頭詞	2	0	0	2	0	0	0	0	0
接尾詞	5	5	3	0	3	2	4	17	4
助数詞	2	0	0	0	0	0	0	0	0
計	356	711	484	645	814	880	1252	1028	1985

IV 討 論

ある個人もしくは集団が理解しうる語彙量に個人差があることは認められている。このように語彙量に着目し、それを調査することは、その個人

もしくは集団の言語能力を診断する1つのインデックスを得ることとなり、言語指導・言語教育の重要な手がかりを得ることになる。したがって、個人や集団が所有している語彙がいかなる語によって構成されているかという点が重要になってくる。

そうした視点から、本研究は語彙を量的ならびに構造の面から分析することが目的としてなされた。

本研究では、幼1が7名、幼3が9名とサンプル数が少ないために幼1と幼3の年令の差異についての統計的検定は行なわない。しかしながら、以上の結果から次のようにまとめられるであろう。熟知語数は幼1が90、幼3が900であり、幼1に比べ幼3の方がはるかに多い。カテゴリ別では、幼1および幼3ともに人間語彙、生活語彙が多く、社会語彙、文化語彙が少ない傾向にあるといえる。又、品詞別では、幼1が名詞、形容詞動詞の順に熟知していたのに対し、幼3では、名詞、動詞、形容詞の順であった。

さて、従来の結果と本研究の結果を比較検討してみよう。語彙の構造の分析は阪本の分類体系を用いて行なった。阪本の体系はあくまでも、子どもの立場から、子どもの生活領域との関連を考慮して体系付けられたものであり、語彙を所有する者の生活の必要を反映していると考えられる。久保¹⁾、阪本²⁾、長野⁴⁾らの先行研究の結果と本研究の結果はほぼ一致している。すなわち、人間語彙生活語彙、自然語彙が多く、社会語彙、文化語彙が少ないということである。従って、阪本の分類体系による語彙の構造分析にもとづく限りにおいて、健聴児とろう幼児を比較した時、構造的な差は認められないと考えられる。

品詞の構成をみてみよう。従来より言語の習得は、初めは100%が名詞であり、それが2才ごろ

表 17 品詞別の平均語数

	名詞	数詞	代名詞	動詞	形容詞	副詞	接続詞	助動詞	助詞	感動詞	連体詞	接頭詞	接尾詞	助数詞	計
\bar{x}	590.9	16.4	7.0	179.0	68.8	24.1	3.3	2.1	7.3	3.1	0.4	0.4	4.8	0.2	906.1
SD	272.0	2.9	4.8	140.0	20.7	18.8	4.9	1.3	3.3	2.7	0.5	0.5	4.6	0	
%	65.2	1.8	0.8	19.8	7.6	2.7	0.4	0.2	0.8	0.3	0.04	0.04	0.5	0.02	100

表 18 分散分析表

変動因	平方和	自由度	平均平方	F
品詞	24859.98	14-1=13	1912.31	290.62 ^{**}
個体	2.12	9-1=8	0.27	0.04
残差	683.95	13×8=104	6.58	
全体	25546.05	14×9-1=125		(^{**} P<0.01)

に60%、3才で50%台となるといわれている。本研究の結果も幼1、幼3ともに名詞が多く、先行の知見と一致している。また品詞間の構成の順序は、大久保らの結果⁵⁾では名詞、動詞、副詞及び形容詞、代名詞となっている。又、英語圏ではあるが、McCarthy²⁾も名詞、動詞、代名詞、副詞形容詞であることを報告している。本研究においては、幼1が名詞、形容詞、動詞の順であり、先行の結果と異なっていた。幼3と幼1において品詞間の構成が異なっていたことから発達的な側面を検討する必要があるだろう。

住の研究⁹⁾によれば、健聴児と比較してろう児はかなり緩慢な言語発達の様相が示されている。本研究は、「熟知」という点から分析を試みたのではあるが、幼1及び幼3ともに当該の年令の健

聴児に比べかなり少なく、ろう児の語彙量の貧弱さは以前として残された問題であろう。語彙が貧弱であることからろう児の精神生活を貧困にしているという指摘⁹⁾もあるように、言語指導においてもこの点については検討を要すると考えられる。

本研究は、ろう児の語彙構造の発達を明らかにして、それに基づいて語彙の系統的な学習を計画するための基礎資料を得ることにあった。そうしたことから、本研究の結果をみても、言語素材を考える時、本研究が対象とした集団についてはまず最初に、系統的配列の基準として、なるべく基本的な語から始め、しだいに特殊な語へと導くことができ、語彙の学習を合理化することができるであろうと考えられるからである。

今回はサンプル数も少なく第1段階の研究であるが、今後はこうした視点を更に解明する方向で検討していくつもりである。

ここで言語の研究で大切ないわゆる機能語やシンタックスとの関係について考察しておこう。

最近の心理言語学の研究は句構造文法 phrase structure grammar や変形文法が重視されるようになってきている。これはとりも直さず、統語論の重

表 19 t 検定表

	名詞	数詞	代名詞	動詞	形容詞	副詞	接続詞	助動詞	助詞	感動詞	連体詞	接頭語	接尾語	助数詞
名詞														
数詞	44.094 ^{**}													
代名詞	39.225 ^{**}	4.550 ^{**}												
動詞	9.433 ^{**}	6.112 ^{**}	9.595 ^{**}											
形容詞	27.414 ^{**}	14.033 ^{**}	15.319 ^{**}	3.325 ^{**}										
副詞	27.488 ^{**}	0.313 ^{**}	7.532 ^{**}	9.489 ^{**}	7.567 ^{**}									
接続詞	32.836 ^{**}	4.759 ^{**}	4.664 ^{**}	12.797 ^{**}	11.797 ^{**}	14.291 ^{**}								
助動詞	41.907 ^{**}	9.214 ^{**}	7.921 ^{**}	10.167 ^{**}	19.757 ^{**}	9.240 ^{**}	0.987 ^{**}							
助詞	35.223 ^{**}	4.259 ^{**}	0.605 ^{**}	9.572 ^{**}	17.449 ^{**}	4.934 ^{**}	3.129 ^{**}	4.975 ^{**}						
感動詞	31.752 ^{**}	4.502 ^{**}	3.658 ^{**}	12.766 ^{**}	13.401 ^{**}	12.520 ^{**}	0.990 ^{**}	0.260 ^{**}	3.745 ^{**}					
連体詞	37.798 ^{**}	7.696 ^{**}	12.685 ^{**}	12.619 ^{**}	18.898 ^{**}	15.501 ^{**}	2.656 ^{**}	3.912 ^{**}	7.935 ^{**}	4.392 ^{**}				
接頭語	45.686 ^{**}	10.846 ^{**}	6.754 ^{**}	9.922 ^{**}	24.856 ^{**}	8.590 ^{**}	1.181 ^{**}	3.286 ^{**}	4.983 ^{**}	1.802 ^{**}	0.049 ^{**}			
接尾語	69.800 ^{**}	5.201 ^{**}	1.242 ^{**}	7.731 ^{**}	11.508 ^{**}	4.336 ^{**}	1.843 ^{**}	1.531 ^{**}	1.371 ^{**}	1.156 ^{**}	3.362 ^{**}	3.298 ^{**}		
助数詞	56.660 ^{**}	11.960 ^{**}	8.938 ^{**}	9.800 ^{**}	21.695 ^{**}	8.862 ^{**}	1.711 ^{**}	4.476 ^{**}	5.639 ^{**}	2.238 ^{**}	0.471 ^{**}	1.000 ^{**}	5.033 ^{**}	

(^{**} P<0.01)

視に他ならない。つまり、単語と単語をどう連結させるかという問題である。思想の表現は単語では十分におこなえないということは言うまでもないであろう。しかし、十分な思想の表現にとって大切な文や文章でも、それを構成するものは単語なのである。ここではまずこの面の研究の手はじめとして文や文章の単位である単語の熟知性を問題にしたわけである。この面の研究も開発すべき点は多々あるが、次第に、統語論の研究にも、ふみ出していきたいと考えている。

V 要約

本研究は、ろう幼児を対象として、ろう児の語彙を量的ならびに構造の面から分析し、言語指導における基礎資料を得ることを目的としてなされた。方法として、ろう幼児の母親の評定による語彙の熟知度を測定することによりなされた。その結果として、品詞では名詞が多く、人間語彙、生活語彙が多く、社会語彙、文化語彙が少ないという結果が得られた。これらのことから言語指導の問題が論議された。

今後は附属語の扱いについて工夫し、又もう少しサンプル数をふやすことが大切だと考えている。

(付 表)

1. 語彙の分類体系

- a 人間語彙……直接に人間そのものに関して表現しようとする語彙。
 - a 1 呼称……人間を区別する呼称。オトウサン、オバサン、オトコ、コドモなど。
 - a 2 身体・衛生……身体 of 名称 (動物の身体を含まず)、状態・医薬品など。アタマ、セナカ、ナミダ、クスリなど。
 - a 3 行動……人間の行動および肉体の働き。アルク、ハナス、消化など。
 - a 4 心理……人間の精神現象。オクビョウ、カナシムなど。
- b 生活語彙……人間の生活に関して表現しようとする語彙。
 - b 1 飲食……飲食物 of 名称。ゴハン、お茶など。
 - b 2 服飾……衣服および装身具 of 名称。キモノ、エリ、ユビワなど。
 - b 3 住居……住居および家の部分 of 名称。イエ、ザシキ、タタミなど。
 - b 4 道具……日常生活に用いる普通 of 道具、家具および材料。エンピツ、ツクエ、バケツ、クギなど。
- c 自然語彙……自然に関して表現しようとする語彙。
 - c 1 自然現象……自然物および自然現象。ツキ、アメ、デンキ、吹ク、ウマレルなど。
 - c 2 地表……地球 of 表面 of 名称。ヤマ、ハタケ、ウミ、アナなど。
 - c 3 動物……動物および動物に関して特に用いられるもの。ウマ、タテガミ、イナナクなど。
 - c 4 植物……植物および植物に関して特に用いられるもの。サクラ、エダ、咲ク、枯レルなど。
 - c 5 鉱物……加工されていない鉱物 of 名称。キンナマリ、イシコロなど。
 - c 6 時……時や季節 of 用語。アサ、トシ、フユなど。
- d 属性語彙……一般 of 事物現象 of 特性に関して表現しようとする語彙。
 - d 1 数量……数量 of 単位および多少。ヒキ、イクツ、タクサンなど。
 - d 2 形……事物 of 形。マルイ、トガル、オオキイなど。
 - d 3 色……色彩。アカ、キイロイなど。
 - d 4 位置・関係……方向を含む。イタダキ、ヒダリ、ヒガン、トオイなど。
 - d 5 性質……ヤワラカイ、アツイ、ヒロイ、チガウなど。
 - d 6 状態……カタムク、マガルなど。
- e 社会語彙……社会的にあるものに関して表現しようとする語彙。
 - e 1 組織・政治……社会的組織および政治関係。クニ、ギンコウ、オサメルなど。
 - e 2 職業・身分……ダイク、センチュウなど。
 - e 3 交通……交通・通信関係。テイシャバ、キセン、ポスト、デンワなど。
 - e 4 産業……商業関係をふくむ。コウバ、ゴフクヤ、ザイサンなど。
 - e 5 軍事……軍事および兵器。センソウ、カイゲン、グンカンなど。
- f 文化語彙……特に子どもにとって文化的にあるものを表現しようとする語彙。

- f 1 社会文化…… f 2 以下に含まれないもの。シンブン, トショカン, マツリなど。
- f 2 知識・教育……学習生活に関するものを含む。レキシ, コトバ, オサライ, エホンなど。
- f 3 芸術……オンガク, ショウカ, シャセイなど。
- f 4 機械……交通関係は「交通」に, 兵器は「軍事」に, 簡単な道具は「道具」に, それ以外のもの。ボウエンキョウ, ハタ(機), トケイなど。
- f 5 運動・遊戯……遊具などを含む。ヤキユウ, オニゴッコ, ニンギョウなど。
- g 一般……上記に分類できないもの。
- g 1 一般・雑

文 献

- 1) 久保良英(1928): 幼児の言語発達
- 2) McCarthy, D. A. (1930): The language development of the preschool child.
- 3) 中野善達(1970): 発達の障害と教育, 児童心理学講座(金子書房)
- 4) 長野師範男子部付属小学校(1944): 児童の語彙と国語指導
- 5) 阪本一郎(1960): 子どもの語彙 児童心理
- 6) 阪本一郎(1969): 教育基本語
- 7) 佐藤昭一ら(1971): ろう学校生徒の語彙と言語表現, 東北大学教育学部紀要
- 8) 牛島義友(1943): 語彙頻度調査
- 9) 住宏平(1959): ろう・哑, 児童心理学ハンドブック(金子書房)

Summary

The Study of the Vocabulary in Deaf Children

Akira Okada and Shigeyuki Tuzuki

The aim of present study is to analyse the vocabulary of deaf children from the standpoints of numbers and structure of the vocabulary which they possess.

All subjects were children in kindergarten attached to the school for deaf. Younger group consists of seven children, while elder group consists of nine children.

2,980 words presented to their mother who were asked to judge whether children had familiarity to those words or not.

In younger group, the ratio of familiarity was 3.2%.

They possessed much vocabulary on man, life, nature, and quality. In the parts of speech, they possessed much noun, adjective and verb.

In elder group, the ratio of familiarity was 30.4%. They possessed much vocabulary on noun, life, nature, and quality.

In the parts of speech, they possessed much noun, verb and adjective.

In the teaching, it would be important that we should begin teaching from familiar words.